



筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第23号

フォローアップ研修の20年

学外研修

目 次

初めての外出 ―都立中央図書館―	中島真哉	1
国立国会図書館を訪ねて	古田とし美	1
図書館情報大学附属図書館・茨城県立医療大学 国立公文書館つくば分館見学	廣田紀代	2
国際子ども図書館見学	海津裕子	3
印刷博物館を見学して	小園良子	4
放送大学附属図書館・メディア教育開発センター見学に参加して	熊谷澄子	4
放送大学附属図書館見学	藤原文代	5
～芸術の秋～ 国立公文書館見学	滝澤容子	6
「明治大学図書館・大塚図書館秋葉原地区」見学に参加して	中堀桂子	8
一橋大学附属図書館見学の記	高田定司	9
成蹊大学情報図書館見学	佐々木ますみ	11
東京都立中央図書館見学	太田恵理子	12
ボランティア1年生、はじめての社会科学見学 (国立情報学研究所 NII)	木ノ下敏子	14
東京大学総合図書館見学会に参加して	挾間絵里	15
筑波大学附属大塚図書館見学記	鈴木悦子	16
お茶の水女子大学附属図書館見学記	矢部健	18
東京工業大学見学に参加して	島田久美	20
慶応義塾大学三田メディアセンター見学	山内衛	21
茨城大学図書館見学	谷田部伸子	22
1時間半のタイムトリップ	佐々木ますみ	23

編集に当たって

筑波大学附属図書館ボランティアは活動の一環として広報紙「うたがき」を発行しています。

このうち10号から14号まで、ボランティアの活動内容の紹介とボランティアが自主的に行う研修(自主研修)を紹介し、また、15号では図書館主催のフォローアップ研修の中から主に学内で行われた研修について特集しました。

今回は図書館主催の学外研修をテーマとし、会員の親睦と連絡のための会報に掲載された研修の報告文の中から記事を抜粋して編集し、学外研修の歴史を振り返りました。このような各種の研修を受けられることも、附属図書館ボランティア活動の魅力のひとつです。

広報紙「うたがき」は第17号から筑波大学附属図書館ウェブサイトのボランティアのページに掲載されています。私たちボランティアの活動をより多くの皆さんに知っていただければと願っています。ご興味を持たれた方々のボランティア活動への参加を歓迎します。

(広報部員一同)

初めての外出 ―都立中央図書館―

中島真哉

筑波大学図書館と出会って以来、本館の多くの長所が紹介されてきましたことは、みなさまご存じの通りです。それを肌身で実感するためにも「ここでない図書館」を見聞したいもの、という気持ちがいつしか湧いてくるのは当然の理と申せましょう。沸いて飲めるはコーヒー、紅茶、こっちの沸いた気持ちは、約 1 年になんなんとする時間をかけて発酵し、ついに 10 月 9 日、気谷陽子氏引率のもと 15 名参加の都立中央図書館見学研修会として実現しました。

中央図書館は、日比谷図書館の蔵書がそっくり移されて、1973 年に新設されました。地下鉄広尾駅から程近い有栖川宮記念公園の一画の堂々たる現代的建築。街も店も公園もアンティーク風に、セピア風に、と心がけているかのような中で、「おお、これは現代じゃ」とつぶやきたくなる様子です。心配していた雨も上がり、日帰り修学旅行のいい気分でランチを楽しんだ後、本番の研修のために気持ちを切り替えて引き締めるにはパワーが必要でしたが、我のみの苦勞にあらざりしや。

この図書館の開架部分の本は 20 万冊ということで、目指す本だけにしか出会えない閉架式図書館の利用ということを改めて考えさせられました。また、視覚障害者に対するサービスで、点訳に携わった方々の測り知れないエネルギーに思いをいたすほかありません。こんな大量の点字本を一人 1 セットずつ持てたりするものでしょうか。一冊の辞書が点訳するとどのような量になっていくのかを、こうやって見せ付けられると、蔵書マニアの部屋など、一瞬のうちに家一軒分、ポップコーンのように弾けて飛んでしまっても未だ足りないのは確実です。利用者の不便さにも絶句してしまいます。

おかげさまで今回は東京行きというちょっと長いお散歩を含めて、大変意義ふかくも楽しい研修となりました。実現のため、お骨折りいただいた本学図書館の方々や激務のなかでご引率の勞をくださった気谷さん、また貴重なお時間をさいてご案内くださった都立中央図書館の方々にこころより御礼申し上げます。 (1996 年 10 月 9 日見学)

国立国会図書館を訪ねて

古田とし美

去る 11 月 4 日、千代田区永田町にある国立国会図書館を訪れました。

深まりゆく秋の一日、大学図書館側から気谷さんが案内のため参加して下さり、私達ボランティア 16 名は、実り多いひとときを過ごさせていただきました。

周知の通り、国立国会図書館は国会の図書館であり、同時に行政、司法の各部門、さらには一般国民に対しても開放されている唯一の国立図書館です。また、法律で定められた

納本制度により、国内での出版物は全てここに収集されることになっています。

その膨大な蔵書数は、図書だけで654万冊、マイクロフィルム、刊行物等を合わせると1300万種以上にも及ぶそうです。総床面積は約14万8千平米、書架の総延長は412km[東京一大垣間に匹敵]と先ず、その桁外れの規模に圧倒されてしまいました。(因みに筑波大学中央図書館では、蔵書数195万、総床面積1万9千平米)。

資料は一部を除き、全て閉架式で、個人に対する貸出しはできませんが、閲覧は目録や書誌、索引を利用して行うことができます。資料はほとんどがデータベース化され、オンライン検索が可能です。旧帝国図書館時代の手書きのカード式目録も現在使用されていて、その歴史を伺い知ることができます。

利用者の請求票はエアシュータで各資料室に運ばれ、垂直・水平方向に走るコンベアに乗って目的の本が運ばれて来ます。その様は館内にトロッコ鉄道が敷かれているようで、どこかユーモラスでもあります。また、国内外の図書館協力も多岐にわたり、いかなる資料や情報の入手も可能であるように思われます。

実際、この図書館には、すべてを所蔵しているという誇りが感じられ、ここで尋ねれば、必ず目的が達せられるという信頼と豊かさがあります。さらに、国内刊行資料を全て保存している点で、私達の生きた証とも言える「大いなる文化遺産」に相違ありません。

今回の訪問で、特に感銘を受けたのは、新館の地下八階にも及ぶ書庫でした。

建物の中央には、地下の最下層まで外光が届くように『光庭』と呼ばれる吹き抜けの四角い庭が設けられ、その膨大な蔵書に自然の光が届くように配慮されています。

古文書や幕末動乱期の貴重な資料、様々な分野の専門書から、日常身の周りにある雑誌までが、深い沈黙の中でその翼を休めていました。長い時の試練に耐えて到達した沈潜と集中の世界・・・そして過去と未来の両方に通じる永遠に属する世界を垣間見たように思われました。

家族が寝静まった夜のひととき、小さなパティオが月の光、星の光を集め、幾千万もの夢を密やかに包んでいることに思いを馳せて、心に小さな灯がともるのは、私だけでしょうか。
(1997年11月4日見学)

図書館情報大学附属図書館・茨城県立医療大学

国立公文書館つくば分館見学

廣田紀代

見学した施設は「図書館情報大学」「茨城県立医療大学」と「国立公文書館つくば分館」の3施設でした。「図書館情報大学図書館」は開館して20年です。その展示室には紙が発明される以前に使われた書物の材料である、竹簡(薄くそいだ竹片)に書かれた経書、手書きされた書物等で昔の人の苦勞を感じました。今は情報通信の時代、多量情報の取得にイ

ンターネットなどが持つ囃され、音声・画像も椅子に座ったままやりとりできる時代のようですが、中身は浅くなりがちで注意が必要です。ですが機械を敬遠するようでは、いろいろな本が読めません。学生が何気なくパソコンを使いこなしているのを羨ましく思いました。ここは学外者でも、調査・研究の目的なら、入館、所蔵資料の閲覧や複写が可能です。

「茨城県立医療大学」は平成7年に開学した大学で、高齢化社会での保健・医療・福祉の現場に高い知識・技術と心を持った学生を養成するそうです。この学校の学生は就職率が100パーセントといます。新しい大学なので資料数が少ないけれど、専門に特化、分類に工夫されています。学外者でも許可を得れば利用することができます。

「国立公文書館つくば分館」は古い公文書を保管して、閉架式で利用に供する機関です。平成10年の開館だから出来たばかりです。利用者は研究目的の成人なら誰でもです。現在、天皇陛下の御在位10周年記念の展示会が開催されています。

これらの施設見学をして、私たちは周りに幾つもの情報施設があって、かなり自由にいろいろな資料に触れる事が可能な環境にあること。また現今の環境を活用するには、パソコンとインターネットを使える事が大事だと改めて考えさせられました。

(1999年11月8日見学)

国際子ども図書館見学

海津裕子

11月2日雨の中、上野公園の国際子ども図書館見学に参加しました。5月5日に日本で初めての国立の児童書専門図書館として部分開館しましたが、まだ半分以上が工事中で、全面開館は2002年の予定だそうです。

納本された本を収蔵した2階の資料室と、アメリカ児童図書週間ポスター展が開かれていた3階のミュージアム、屋根裏部屋のような作りになっている子どもの部屋を案内していただきました。ここには翻訳で読んでいた外国の絵本の原書があったり、逆に英語やタイ語に訳された日本の児童書があり、本棚も子どもが手に取りやすい高さに作られており、本に親しめるように手作りの展示が工夫されていました。ただ現在のところ、自由に手に取って読める本も、購入したり寄贈された本約3000冊で、広さも手狭な感じがしました。

全世界から児童書を収集し、国内の児童書のデータベースを構築してインターネットで公開し、検索サービスを充実させていく、児童書のデジタル化を進め、展示会も開催するという、案内して下さった図書館員の熱意のこもったお話からも、これからこの図書館を充実したものに作り上げていこうという情熱が伝わってきました。

子ども図書館の建物は明治39年に創建された洋風建築で、外壁のレンガやレリーフもそのまま生かされ、内部は天井が高く落ち着いた空間が広がっています。全面開館したら是

非もう一度ゆっくり絵本に会いに来ようと思いながら建物をあとにしました。

この日はちょうど隣の東京国立文化財研究所の黒田記念室も開館日で、思いがけず「湖畔」など黒田清輝のすばらしい絵画を目にすることができ、欲張って科学博物館の「ダイヤモンド展」にも立ち寄り、盛りだくさんな一日を楽しみました。

(2000年11月2日見学)

印刷博物館を見学して

小園良子

図書館ボランティアに入れて頂いて一年目の、最初の学外研修「印刷博物館」のお知らせを見た時、なじみの無い「印刷博物館」にただ古い印刷機などが展示してある程度の博物館だろうと、殆ど期待しておりませんでした。

ところが行ってみて、その規模の立派さと内容の充実に驚かされました。古来人々が文字を考えだし、情報を伝えたり、後世に残したりする為になされた工夫や努力。現在の最先端の情報システム迄の道のりが、おぼろげながらも感じる事が出来ました。

展示場のほか、普通では見る事の出来ない資料室を見せて頂いたり、活字を自分で組んで自分のラベルを作ることが出来たのも、予想外の楽しい体験でした。

個人的な反省。インターネットで前もって印刷博物館の内容を下調べをしていれば、もっと重点的に見学することが出来たと思います。これは全てに当てはまる事ですが、溢れる情報を必要に応じて取り入れる事の大事さを改めて思い知らされました。

雨の中、出かけた甲斐のある充実した一日を過ごすことが出来ました。この企画をして頂いた、図書館公関係の原澤係長、大和田さん、有難う御座いました。

(2001年11月9日見学)

放送大学附属図書館・メディア教育開発センター見学に参加して

熊谷澄子

11月1日、平成14年度フォローアップ研修学外施設見学の一環としてメディア教育開発センターを訪れた。このセンターは、国立大学の共同利用機関として昭和53年に設置された放送教育開発センターが改組されて設置され、マルチメディア利用促進のための大学共同利用機関として機能しているそうだ。建物は大学に隣接していて、最初に、放送大学の先生方が講義しているところをテレビで放映する本物のスタジオへ案内して頂いた。スタジオ内に置いてある大きな講義用の机の前後左右に置かれたスタジオ用カメラ、吹き抜ける高い天井から吊るされているたくさんの照明、又、フロア後方の高窓ガラスを隔てて音

声や照明機器を操る調整室など、まさしく本物の撮影現場だという感じがした。ここで年間 700 本の放送番組を制作しているそうだが、私達の見学のすぐ後から、撮影が始まるということで、どこからともなく大勢の技術スタッフの皆さんがフロアに集まってきていた。放送番組制作の他に、衛星通信を利用した大学間ネットワークを活用しての授業の取り組みも行われている。大学間での相互授業や、教員志望の学生などのために小学校で今、実際行われているという授業を取り込んでの授業や質問のやりとり風景なども大きなスクリーンで見せていただき IT 教育の最先端に触れてきた。

それから、もう一つ興味深い体験もしたが、こちらも、バーチャルリアリティ技術などの最先端技術を教育に応用できるかどうか、その有効性を研究したり、それを利用した教材の開発を行うなどの目的で作られた仮想環境研究施設内での体験だ。三次元仮想空間を実現するシステム（外部、内部に立体音響再現装置や、グラフィックコンピューター等の装置を備えた多面スクリーンが張られた一辺 3m の空間）が設置されていて、私達は、立体視用の眼鏡をかけて中に入った。しばらくすると、立体映像が浮かび上がり美しい花が眼前に現れると蝶が飛び廻った。花の蕾に特殊な棒の先端で触れるとみごとに開花するような仕掛けもあり、恰も花畑の中にいるような臨場感のある感覚にとらわれた。その他にも自分が異次元空間に浮かんでいて周囲を見下ろしているような不思議な感覚も体験出来、面白かった。この後、私達図書館ボランティアが最も興味ある放送大学図書館へと案内して頂いた。

今年度のフォローアップ研修は行きも帰りも、時おり激しい雨に見舞われたが幸いバスの中、参加者も多かったので大学側が大型バスを用意して下さって本当に良かった。見学実現にご尽力下さりなお且つ、雨の中を出迎えて下さり、案内や説明までして下さい、元筑波大学図書館勤務、現放送大学附属図書館課長の堀内氏と課長補佐の上原氏に厚く御礼申し上げます。
(2002 年 11 月 1 日見学)

放送大学附属図書館見学

藤原文代

放送大学附属図書館の方は、平成 2 年にできたもので、中央に吹き抜けのある 3 階建てで、こじんまりとしています。蔵書数 63 万冊と言っても、全国 50 箇所にある学習センターに分散しているので、ここの図書館に配架されているのは 23 万冊だそうです。筑波大学の 1/10 というところでしょうか。書棚の間隔が広く背も低くて、通路もゆったりしているので圧迫感がありません。放送大学は、当然通学生がいませんので、利用者は少なく静かなものです。カウンターには、スタッフの方が一人しか出ていませんでした。

映像音響資料室の机には、それぞれモニターが付いていて、講義ビデオを見ながら勉強できるようになってます。放送大ならではの設備でしょう。

1階奥には貴重図書室があり、鍵を開けて中を見せていただきました。古い洋書のコレクションの中から、アイザック・ニュートンの「プリンキピア」の初版本（1687年発行）が机の上に置かれていました。非常に貴重な本を、白い手袋をして恐る恐るページを繰ってみる人もいました。

もうひとつ興味深いものが、3階の展示コーナーにありました。私はここで初めて見たのですが、珍しい「ちりめん本」のコレクションが展示してあります。ちりめん本は、明治中後期に輸出用に栄えたようで、日本昔噺を題材に英語版・独語版・仏語版等があります。ちりめん状の紙に印刷したように見えますが、最初に木版手刷りしておいて、その紙を84%にまで縮めるのだそうです。この精巧な技術に驚かされますが、今は残念ながら廃れてしまったとのこと。本の修復のために復元されたものが、所蔵目録に貼付されていて、手で触れてみるすることができます。カレンダーも含め200点ものコレクションは、時々一般にも公開されているようです。

今まで知らなかった「ちりめん本」に出会え、貴重な収穫でした。

（2002年11月1日見学）

～芸術の秋～ 国立公文書館見学

滝澤容子

ロングブーツを履くには少し早い様な暖かい陽気の11月5日(水)に、図書館公開係の大久保係長を含め11名のメンバーで、学外研修として、北の丸公園内の「独立行政法人国立公文書館」（以下公文書館）を見学した。この日は常磐線でトラブルがあり、私は一本早い電車に乗ったため事無きを得たのだが、数名が欠席をしたようだった。公開係からあらかじめ頂いた資料によると、東京国立近代美術館の隣であるとの事。この美術館を学生時代に訪れたわたしであったが、その時、隣に公文書館があったとは知らなかった。

公文書館玄関前に集合し、まず「国立公文書館」と「（国立公文書館）アジア歴史資料センター」のパフレットや常設展のしおりを頂いた。英語名のNational Archives of JapanのArchivesをどこかで聞いた名前だと思っていたら、NHKがテレビ放送50周年で、深夜にNHKアーカイブスとして過去の番組を放送していることに思い当たった。ちなみにarchiveを研究社の『新英和中辞典』で探してみると、「記録 [公文書] 保管所、文書局」とあった。やはり、公の物事は、昨今取り沙汰されているように、英語やカタカナだけでなく、日本語で知っておかなければと思わされた。

館内に入って、しばらく常設展の「公文書に見る国のかたち—戦後日本のあゆみ—」をTさんと一緒に「昔の人は字がうまいわよねえ。」と丁寧に見ていたら、たちまち時間切れ。「古書・古文書の世界」はおあずけとなった。又、次の機会に。

ところで、公文書館がどのような所なのか、なるべく簡潔に述べてみよう。資料やパン

フレットによると、本館は地上4階、地下2階、建物面積11,550平方メートル（筑波大学附属図書館（以下附属図書館）は総スペースが25,998平方メートル、中央図書館だけでも19,092平方メートル（「附属図書館概要」）である）で書庫の温度22℃、湿度55%とある。附属図書館内の貴重書庫の温度は因みに20℃、湿度は50%ということを確認した。

又、「歴史資料として重要な公文書等の受け入れ」として「我が国政府の過去の重要な活動」の為に必要な「国政上の重要事項等」の記録されたものを指し、それらを「適切に」「保存」し、公開利用を図り、展示（年2回）し、調査研究を行い、会議・研修会等を実施している機関である。

さて、見学に話を戻すと、集会室で公文書館についてのビデオ（約20分）を見た後、公文書等の保存の過程を見せて頂いたが、何を隠そう私はこれが見たいがために参加したのだ！！この修復業務には、部分的虫損直し、全面裏打ち、入紙（にゅうし）、リーフキャスティング等の方法があり、専門的技術を持った職員が作業に当たっている。

特に部分的虫損直しと全面裏打ちは、絵画の修復と重なり、わたしはこれって芸術よね、と一人悦に入っていた。黙々と作業されている方々（ケニアからの研修生もいらした）のお姿によって、あの映画化された、辻仁成と江國香織原作の『冷静と情熱のあいだ』で、絵画修復師をしていた主人公の事を思い出したのである。（帰りの電車で、Fさんとの話題に上がった。）この根気の必要な作業を一週間から二週間かけるという。女性に適しているようだ。

ところで、この業務を紹介してくださった方が、とてもハイテンションなおじさんだった。午前中にアメリカからの来訪者があったそうで、そのためだろうか。この方が強調されていた大切な事を皆様にお伝えしたい。それは、今、世の中は電子化が進み、本でも簡単に携帯電話やデジカメで閲覧・保存できるが、原本が歴史的価値があるので捨てないようにとのことである。そうでなければ、修復作業は無意味になってしまうのだろう。確かに公文書館でも、附属図書館のマイクロ資料室のように、多くの資料をマイクロフィルム化したものを閲覧する事になっているが、原本はそれを上回るのだ。この方によると2000年保てば国宝だという。アメリカでは最近、原本を大切にする傾向でもあると聞いた。私もインターネットで本を読むより、原本で読むほうを好む。本の香り、手触りは本でしか味わえない。皆様は如何だろうか。又、附属図書館に保存され、増え続ける図書や雑誌も、電子化が進むと、その保存の有様はどうなっていくのだろうか、気掛かりである。

その他、マイクロフィルムの資料を閲覧したり（コピーは一枚30円）、誰でも手続きをすれば、利用証を発行してもらえらる事等を伺って、大変参考になった。

芸術の秋に誠にふさわしい研修であった。お世話になった公文書館の皆様に感謝したい。

（2003年11月5日見学）

「明治大学図書館・大塚図書館秋葉原地区」見学に参加して

中堀桂子

11月11日(金曜日)、標記の図書館見学に行ってきました。少々肌寒い秋の日でしたが、24名の「図・ボラの会」の皆様が元気に参集いたしました。スケジュールは13:15明大リバティータワー入口左手中央図書館入口前集合—各館見学—16:00秋葉原にて解散でした。現地集合現地解散でしたので、午前中はオプションツアーを各自で組んでいた方々が多かったようです。私は午前中は明大博物館に行きました。そこにはボランティアの方(常設展で週2日活動)がいらっしやったので、案内をお願いしました。短い時間でしたが丁寧に説明していただきました。大学の保有する物的知的財産を積極的に公開され、日本でここにしかないもの等興味深いものが多々ありました。アカデミーコモンの地下にありますので、駿河台近辺に行かれた折には見学されることをお勧めします。入場無料です。その後、リバティータワー17階の学食で筑波大の学食との味を比較しながら昼食をとり、午後には図書館見学にうつりました。

図書館エントランス正面には次の銘文が掲げてありました。「肝心な点は感動すること、愛すること、望むこと、身ぶるいすること、生きることです。ロダン」2001年3月16日明治大学創立120年を記念して新中央図書館が開館し、図書館建築賞を受賞しているそうです。図書館職員2人の方のもと2班に分かれて館内を案内していただきました。リバティータワーでもこれが学舎かしらとびっくりしていたのですが、図書館も傾斜地を上手に利用した不思議な建物でした。入口が1Fで、B1-B2-B3と下に降る造りでした。ガラスや吹き抜けが効果的に取り入れられ建物全体がとても明るい印象でした。1階から順に地下の階へと殆どすべての施設をととても丁寧に説明していただきました。図書館サービスの面で印象に残ったことを何点か述べます。1Fマルチメディアエリアでは館内貸し出し用のノートパソコンが30台用意されており、私達が行った時も学生が順番を待っていました。インターネット接続のパソコンが51台あり、学生証を差し込んで立ち上げるのだそうです。でもプリントアウトは1枚10円と有料とのことでした。大体の検索端末からプリントアウトが可能で、しかも、無料の筑波大図書館のなんと恵まれていることでしょうか。閲覧席の他に小グループで利用できる会話も可能な共同閲覧室、静寂な環境で利用する個人机を配備したロダンルームがありました。資料はここでも殆ど開架になっており、筑波大図書館同様に利用者が直接アプローチ出来る様になっていました。でも利用した資料は書架に戻さず返本台におき、専門のアルバイトの学生さんが配架するとのことでした。電子図書館機能はもちろんその他利用者のために様々なサービスが用意されていました。各階にカウンターがあり、各階に必ず職員がいることも印象に残りました。それから、外からの入口がもうけてある多目的ホールや図書館専用のギャラリーがあつたりと外部に向けた図書館の情報発信の場が用意されていました。見学の後、案内の方と懇談を持ち、誠意ある対応に感謝申し上げ、次の見学場所に向かいました。

大塚図書館秋葉原地区は駅前再開発のビルの15階にありました。職員1名で管理しておられ、24時間開館で利用者はカード入館とのこと、現在は40名の法科大学院生が利用しているとのことでした。広い室内は足元までの大きな窓におおわれ眺望がよく、専用ブースもあり学習室、書斎といった雰囲気でした。階下の法科大学院も見せていただき、私達も展望を楽しんで、時間を忘れてしまいました。すでにまちには灯りが点き始め、充実した研修はここで解散となりました。
(2005年11月11日見学)

一橋大学附属図書館見学の記

高田定司

一橋大学のあるここ国立はむかし谷保（やぼ）村と言った。大正15年に箱根土地株式会社（現・プリンスホテル）は東京商科大学を中心とする学園都市構想を立て、国立に学園町地区を開発し分譲を始めた。この谷保村は昭和26年に町制を施行し「国立町」として新発足。そして谷保村は野暮（やぼ）ならぬ立派な国立（くにたち）文教地区として発展した。国分寺と立川の間の駅ということで駅名は「国立」、それがそのまま町名（今は市）に。（Wikipediaより）駅の南口から伸びる大通りは「新東京百景」の一つ、春はサクラ、秋はイチョウと市民の憩いの場である。この大通の東西両側に一橋大学国立キャンパスがある。昔の武蔵野の名残がまるでオアシスの様にこの一橋国立キャンパスに残っている。緑が綺麗。

平成18年度後期フォローアップ研修としてわれわれ図書館ボランティア17名は11月15日、ここ一橋大学附属図書館を見学する機会を得た。附属図書館のある同校西キャンパスは古い大きな木々に囲まれた中に落ち着いたアカデミックな雰囲気を漂わせている。講堂や本館などの施設はおおらかでクラシックな感じ。附属図書館の案内をして下さった学術情報課、課長代理の豊田裕昭氏によると、これらの建物はいわゆるロマネスク風で、大正12年震災後新天地を国立に定め、再建にあたって選ばれた建築様式とのことであった。平たくいえばローマ風、半円アーチを開口部に持つ建築様式、古くは11世紀頃のヨーロッパの教会に見られる。イタリアのピサの斜塔もこの一つとか。（Wikipediaより）



一橋大学はその昔明治8年（1875年）森有禮による私設商法講習所に始まり、東京商業学校、高等商業学校、東京商科大学、など多くの変革を経て昭和24年今日の一橋大学となっている。この間日本の商業、経済界をリードした多くの俊英を輩出している。現在学生5000人、院生1500人を擁し4学部（商学、経済、法学、社会学）と7研究科からなっている。附属図書館は平成12年に新本館を開館している。建物は旧書庫を改造したと言われているが内装は大変立派、天井も高くロマネスク風の重厚な仕上がりになっていてアカデミックな風格を備えている。しかも近代的な図書館として必要な最新の機能が整然と配置されていて気持がよい。時計台を入口として「本館」「雑誌棟」「書庫」からなっており、全床面積14,850㎡（筑波大学附属図書館19,092㎡）、1996年以降の資料はNDC分類に準じた4桁の数字でコード化されている。（1995年以前は独自の分類。）蔵書数約173万冊、そのうちの100万冊と雑誌16,000タイトルは開架式で自由にブラウジング可能となっている。資料はOPACで検索可能。学外のオンラインデータベース、3000タイトルにおよぶ電子ジャーナルへのアクセスも可能である。閲覧机はそれぞれの場所に適宜配置されているがこのほかにも時計台下2階に立派な大閲覧室を備えている。重厚な机が並んでおり、壁の周囲には歴代学長の肖像画、床には著名な学者や先達の胸像が配置されている。雰囲気は荘厳そのもの、まるで教会の礼拝堂みたい。これらの賢人の霊気か精気かに圧倒されているのか、ここでは誰も図書を閲覧していなかった。ここを利用するにはかなりの勇気がいりそうだった。本館2階に「ほんの窓」というコーナーが設けられていた。ここは先生方が図書館の本を紹介されるコーナーとのこと。丁度わが「つくばね」での先生方の投稿によく似ている。「本を残す 本を伝える」、「疫病と世界史」「虹は本当に七色か」など過去の展示に関する資料を参考にいただいた。ひとつのテーマから図書館の資料を如何に調べてゆくかという道程を示唆していて、よいガイドになっている。

大学図書館には古い資料が多いので、これらの資料の整備、修理のための工房があって、専門の職員が配置されている。破損した資料の修理方法について実演を見せていただいた。我々ボランティア一同大変感動した。資料の取扱保存に対する図書館の執念を感じた。上記の「ほんの窓」にも「本を残す 本を伝える」と題した解説が取り上げられている。

当図書館には多くのコレクションがあるようだ。展示室では岡田家古文書が特別企画「江戸時代の豪農と地域社会、岡田家文書の世界」として展示されていた。南大阪地区藤井寺での庄屋岡田家が江戸時代に自ら農を営み、政治、社会にかかわりあった記録を示すもので、商業の大学に相応しい興味あるテーマであった。

一橋大学図書館は公共図書館とは違い、当然ながら学内利用者へのサービスにその機能を集中している。今回の見学を通じ、また豊田裕昭氏との対話を通じて『一橋大学が伝統を重んじ内向的なものに対し、筑波大学は「開かれた大学」を目指し外向的かな?』といった個人的な印象を持った。これは「学外者の受入と学外者への資料の貸出」のありかたにおいても現れている。大学の歴史、置かれている環境によって自ずから違ってくるのだろう、面白いと思った。なお、最後に豊田裕昭氏より「文化財防災ウィール」の講義を受け

た。図書館や美術館に従事する者にとって文化財防災は常に心すべき課題である。



貴重な時間を割いて見学案内をして下さった豊田裕昭氏に心からの謝意を表したい。

図は一橋大学の校章：ローマ神話にでてくる商業、学術の神マーキュリーの杖に二匹の蛇が巻きつき、頂に翼が羽ばたいている。蛇は英知を現す。（一橋大学百年史から）

(2006年11月15日見学)

成蹊大学情報図書館見学

佐々木ますみ

11月7日、学外施設見学として訪れたのは成蹊大学情報図書館でした。吉祥寺駅から徒歩15分くらい、正門を入ると左右に芝生が広がりベンチが並んでいます。少し時間があつたので久しぶりに緑陰の読書としゃれてみました。

正門からすぐ左に見える建物が、2012年に迎える学園創立百周年記念事業の一環として

昨年9月に完成したばかりのできたてホヤホヤの新しい図書館です。外からは左右がこげ茶、まん中がガラス張りの普通の低層建物に見えますが中に入ると、なんといつか見た未来の宇宙基地のような空間が目の前に。1階から5階までのフロアは、ガ



ラス張りの吹き抜け空間「アトリウム」が中央に。左右には55万冊の開架式書架が広がり、その外側には檜並木を眺めながら勉強できるガラス張りの個室閲覧室がフロアを取り巻くように配置されています。3階から5階のアトリウムの中空にはプラネット（惑星）と呼ばれる球体のガラス張りの閲覧室が浮かび、ゼミの共同学習やディスカッション等に活用されるとか。5つのプラネットには公募でそれぞれの愛称が付いていました。「明るく、美しく、暖かい建物」をコンセプトに、入口はにぎやかでだんだん奥に入っていくにつれ静かになっていくという空間作りがなされているそうです。さらに地下1階は貴重書室、地下2階は72万冊収蔵可能な自動書庫です。垂直搬送機での本の入出庫を見学しましたが機械の動きの速い事。また書庫の内部はまるで整然とした無人の工場のように、本が入った

箱やラインが勝手にテキパキと動き回り、しばらく見とれていました。この書庫に人は入れないということなのでもし入力を誤ったら、その本は永久に埋もれてしまうのでは、と少々心配になりました。この建物自体が「作品」であり、作り手の美意識



と実際の使い勝手との間に少々ズレがあるかもネと感じました。

お仕事の時間を割いて案内して下さいました職員さん、ユーモアをちりばめながら丁寧に説明して下さい、楽しかったです。帰りは、直帰組、秋の井の頭公園散策組、喫茶店で一服組、吉祥寺でお買い物組などに別れ帰途についたのでした。(2007年11月7日見学)

東京都立中央図書館見学

太田恵理子

広尾の駅から、なんだかおしゃれな雰囲気のある街を通り、有栖川宮記念公園に入ると、都会のただなかとは思えぬ自然に囲まれる。陸奥盛岡藩の下屋敷から1896年に有栖川宮家のご用地となったとのこと、その百年以上の歴史を思えばこの庭園の風格も納得である。そこここに歴史を感じつつ池を通り、梅など見つつ漸く高みに上っていくと、有栖川宮熾仁親王銅像の先に、東京都立中央図書館の威容が姿を現す。

今年1月にリニューアルされた中央図書館は都立図書館の中核として、資料の収集・整理・保存、そして調査研究の支援のための情報提供を中心に運営されている。

見学はまず図書館の概要説明、続いて館内見学であったが、まず注意を引かれたのは、館外貸出をしない図書館ということである。寡聞にして、国会図書館以外にそのような図書館があることを知らなかった。(実際には、都立図書館は現在、中央・多摩・日比谷の3館で構成されており、日比谷では貸出サービスを行っているし、都内の400ほどの図書館との協力貸出も行われていることから、他所にない資料は中央から貸し出されるのである。協力貸出は年に12万冊になんなんとする) また、蔵書162万冊のうち、リニューアルにより10万冊増えて35万冊になった開架図書も、ほぼ全面開架の筑波大に慣れている者としては「？」であった。内心「借りられない図書館…少ない開架…」と少々不審に思いつつ館内見学を始めたのだが、こはいかに！どの階も多くの利用者で活気づいている。新装な

ったがために利用者が多いのではなく、それだけのサービスが受けられる充実した図書館であるからこそこの賑わいなのであった。

1階には利用者のニーズを考えたビジネス情報・法律情報・医療情報などのコーナーが集中的に配置され、また都立図書館ならではの東京と都市に関する充実した資料のコーナーもある。医療情報コーナー内に設置される疾患別に配列された闘病記文庫なども他所では見られない特色あるコーナーである。各階に配置されたパソコンからは書庫内の資料が直接請求でき、1-3階にはフロア案内の方々がおられ、またレファレンス直通電話も設置されている。レファレンスサービスは来館だけでなく電話・FAX・文書・メールでも受け付けられ、年間10万件を越す利用があるとのことである。更には、独自の資料保全室を持つことも中央図書館の大きな特徴である。広い製本室には独特の静謐な空気が流れており、虫損直しの作業や種々の図書修理・製本用品を拝見したりしつつ一巡するうちに、秘かに(?)設置された神棚を発見したりして、こんなところにも都立図書館百年の歴史を垣間見たような気がするとともに、資料を後世に伝えてゆくという図書館の使命感を感じたのであった。もうひとつ忘れてはいけないのが障害者サービスである。内部は見られなかったが3階には充実した視覚障害者サービス室もあるようだ。5階にはカフェテリアもあり、4階には企画展示室があって、リニューアルオープン記念企画展「都立図書館100年の歩み、そして、未来へのチャレンジ—東京の未来を拓く力へ」の展示がされていた。ついでながら、館内には地産地消の一環としてあちこちに多摩の杉材が使われており、館内の雰囲気作りに一役買っているようであった。

公立・学校を問わず図書館の目標のひとつとして『行きたくなる図書館』をあげるとすれば、都立中央図書館のあの活気は、そのよい実践例の一つとしてあげるに足るものではあるまいか。ボランティアの身としては残念であるが、ボランティアの活動は今のところ行われていないことも付け加えておこう。



企画展示を見終わって、暮れかかった梅林を歩いてゆくと、なにやら人が多く、梅の花にはたくさんの鳥が来ている。よくよく見てみるとメジロやらシジュウカラなんていう小鳥ではなく、トロピカルカラーのインコの群れが梅の花を喰い散らかして雪のように降らせている。最近東京で繁殖しているワカケホンセイインコの群れであった。ここにも東京の新しい事象が現れており、

そんなこともゆくゆくは図書館の情報の一部として伝えられていくのだろうかと思いにふけたのであった。

附記：お忙しい中、丁寧にご案内くださった都立中央図書館の職員の方々にお礼を申し上げます。また、メルマガも出しておられるとのことぜひ登録をとおっしゃっていらしたので、そのことも付け加えておきます。

(2009年1月26日見学)

ボランティア1年生、はじめての社会科見学 (国立情報学研究所 NII)

木ノ下敏子

去る10月26日、今年度の学外研修として、仲川さん引率のもとボランティア12名で、国立情報学研究所を訪問させていただいた。とはいうものの、その日は朝から冷え冷えの、ざんざん降り、なんと、遅れてきた台風が近づいているのである。よりもよって今日?! とも思ったものだが、まあ、現地まで辿り着けば、大きな建物の中だから大丈夫だよ、という心持でもあった。

私は、今年、図書館ボランティア1年生として主にカウンターでの活動を始めた。日々のパートナーであるTulipsの画面で、常に眼にし、資料検索時の強い味方であり、しかしながら私にはいまだに使いこなせないため強敵(!)となっている“CiNii”や“Webcat Plus”。これらを提供している大元の“NII”とは、いったいどんな所なのだろう? 実は、この基本の「き」が、私の関心事だったのである。

NIIこと国立情報学研究所は、当時の文部省(現文部科学省)の提言を受け、昭和51年、東京大学情報図書館学研究センターとして発足し、数々の進化を遂げながら平成12年に一ツ橋の地に移り、国内唯一の情報学研究の機関として現在に至っている。情報学をさまざまな角度から分析、研究し、その成果を生かして、大学や他の研究所などと連携をして有用なデータベース、そのネットワークなどを作り、またそれらを公開することによって多くの学術成果の検索や閲覧を可能にし、それらを踏まえて、各分野の更なる研究の推進などに寄与している。また研究の未来を担う人材の育成なども行っている・・・とお話下さったことを自分なりにまとめてみても、これがまた、なかなか難しいのだ。とはいえ、私にとっての「大いなる謎」は、気のせいかな、ちょっとばかりは霧が晴れてきたかな?

さて、NIIが、多くの学術機関と協力して開発してきた内容を、利用者の使途にも適うように総合的に体系化したもの、それが“GeNii”(「NII学術コンテンツ・ポータル」)である。その中にも、お馴染みの“CiNii”(「論文情報ナビゲータ」学術雑誌等に掲載された論文をそのタイトルやキーワードから検索できる、ここから目次や内容を見ることが出来るものもある)、“Webcat Plus”(「図書情報ナビゲータ」連想、一致検索による図書検

索を行えるもの、所蔵館情報もあり)などが、そのコンテンツとして存在している。

現時点でも、その情報量は、たいへんなものだと思うのだが、それだけに留まらず、既存のもの改良、機能やリンクの追加などの検討が日々行われている。その上、なんと“CiNii”には携帯版もあるのだ。電車の運行状況をチェックしたり、近くのグルメ情報をみたりするのと同じように、いつでもどこでも携帯で論文を探せるとは！稀に見る、超アナログ人間の私にとっては、本当に驚きである。それはさて置き、なんとか来年度、新しい学生さんを迎える春には、少しは彼らのお手伝いができるようになりたいなあ・・・と改めて思うのであった。

NIIの職員の方々に、いろいろなお話を聞かせていただいた後、エレベーターで1階に降りて、外に出ると、雨風の勢いは、先程より明らかに強まっている。でも、とりあえずは3時、お茶の時間。皆さんと近くの学生会館でケーキや軽食でのひとときを過ごし、それから解散となった。お天気が良ければ、ディープな？魅力あふれる本の街、神保町界隈を“神ブラ”といきたかったなあ、とちょっと名残惜しい気持ちをもちつつ、横殴りの雨風の中、ひとりJR御茶ノ水駅までの道のりを歩き出した。そんな中、ふと、食欲中枢を限りなく刺激するスパイシーな香り！それもあちこちから。うーん。これらになんとか抗いつつ、でも、その出所は、しっかりとチェックした私。今度は、「神ブラにカレー三昧」といくぞ、絶対！（でも、お天気のいい日にね。）

(2009年10月26日見学)

東京大学総合図書館見学会に参加して

挟間絵里

さる11月29日月曜日、東京大学総合図書館見学会に参加しました。参加者は27名でした。新御徒町駅で谷田部さん、服部さんとお会いし迷わずに集合場所に行くことができました。

赤門前には既に皆さん集まっていたらして、揃ったところでまず記念撮影。仲川さん、皆川さんの引率で図書館前まで移動しました。戦時中金属供出に備え、図書館前の噴水塔やポーチ外灯が取り外されていたようですが、噴水塔は戦後復元され、総合図書館玄関前のポーチ外灯も昨年復元でき、点灯式が行われたそうです。噴水塔は奈良の三重塔の最上部の九輪をモチーフにしたものだそうです、実際には八輪しかないそうです。



見ているとてっぺんから噴水が噴き出し、私たちを楽しませてくれました。

図書館に足を踏み入れるとまず、目の前の大階段のレッドカーペットが目に入ります。以前勤めていらしたという、まるで図書館の生き字引のような関川副館長が案内してくださいました。図書館は関東大震災で全焼したそうですが、ロックフェラー財団からの資金提供があり、再建することができたそうです。天井が高く、全体的に歴史の重みを感じました。自習室も大きなシャンデリアに、木製の彫刻が施されたどっしりした大きな机、太くてがっしりした柱。地下書庫は蔵書の長期保存のためにたくさんのパイプが張り巡らされ、暗く、まるで船の機関室のようでした。また、館内には様々なレリーフや胸像が所々に展示され、当時の図書館長がワルシャワに行った折に船便で取り寄せたというショパンの左手のレプリカもあり、音楽系の学部のない大学なので印象に残りました。

図書館を出て解散し安田講堂の方へ歩いて行くと、折しも今年ノーベル化学賞を受賞された根岸先生の講演会が開かれていて、入口に看板が掲げられ、カメラを構えている人が大勢いて賑やかでした。お天気も良く、キャンパス内の銀杏もきれいに色付き、青空と相まって美しかったです。

ランチは行き先が分かれてしまいましたが、私たちは皆川さん案内の下、附属病院最上階のレストラン「ブルークレール精養軒」に行きました。見晴らしも良く、窓から建設中のスカイツリーがよく見えました。帰り道、旧岩崎邸庭園に立ち寄り、見学しました。前日に、大河ドラマ「龍馬伝」の最終回があったこともあり、大勢の人で混雑していました。

東京大学総合図書館見学では、関川副館長のおかげで広い館内を短時間で効率よく、わかりやすい説明で案内していただくことができました。また、仲川さん、皆川さんには引率していただき、ありがとうございました。とても有意義な見学会の一日を過ごすことができましたこと、ここに感謝申し上げ、ご報告とさせていただきます。

(2010年11月29日見学)

筑波大学附属大塚図書館見学記

鈴木悦子

今年9月に開館したばかりという大塚図書館を、11月4日(金)ボランティア18人が落合さん、仲川さんの引率で見学。まわりは、公園で木立に囲まれている。新しいガラス張りの建物の右側の入口を入ると広々としたロビーが目飛び込んできた。広い階段を下りると、地下1階なのにガラス越しに外の景色がわかる。



図書館の入口の右壁には、2005 年筑波大学芸術賞受賞作品、狩野宏明さんの大きな洋画があり、旧大塚図書館を見学した時の暗い、狭いという印象とは様変わりだった。

中央図書館から異動された浅野さんの案内で入館すると PC-talker や最新型の液晶拡大読書器があり、PC や机も多数備えられている。雑誌は、左側に筑波



大、右側に放送大の雑誌がある。綺麗で明るく広々としている。

筑波大の新作雑誌の先に放送大学図書館の書架がある。その書架側面は青色である。放送大学の図書は、背表紙上部に青い丸いシールが貼ってある。そして、夫々の本の外表紙には、大学名のところが青地の放送大学の資料 ID が、その反対の表紙には筑波大学附属図書館の資料 ID が貼ってある。一冊の図書の表紙の前と後に 2 種類の資料 ID が付いている。これは、初めて見た。

放送大学図書館の書架には、資料落下防止のバーが付いていた。揺れを感知すると本棚の各段の下板に収まっているバーが、数センチはね上がる。4 月、地震で落下散乱した中央図書館の資料をヘルメット姿で拾い上げて棚に戻した作業のことが頭をよぎった。これは良い地震対策のひとつと感心した。が、放送大学図書館の青色の棚のコーナーのみで筑波大学図書館の書架にはない。集密書架は、人感センサー付き。ここには、旧法科大学院図書室と大塚図書館の蔵書があるが、書架スペースにはまだまだ余裕がある。



理療科教員養成施設があるので対面朗読室もあるかと思っただ、ない。3 室ある多目的学習室を利用することになる。しかし、特に防音工事を施されているわけではないようだ。

入口を入れて左に、「時間外複写物引き渡し用」コンビニボックスと「お取り寄せ資料受け渡し用ロッカ

一」という、見慣れないものがあった。カウンターが閉まり職員さんがいない時間帯の時間外利用者（東京キャンパス所属者のみ）が、登録をして利用するものである。帰り際、建物を出ようとする左手に大きなキリンが、2009年筑波大学芸術賞受賞の渡部直さんの立体作品であった。さすが、筑波大学とを感じる。広々としたなかで芸術鑑賞ができる。

震災時は工事中。工事関係者の中には、交通手段の関係のようだが、現場入りできない人もあったが、工事では妨げになるような大きなトラブルもなく、予定通り開館したという。
(2011年11月4日見学)

お茶の水女子大学附属図書館見学記

矢部健

フォローアップ研修の学外施設見学として、お茶の水女子大学附属図書館を見学した。本学図書館の落合専門職員、仲川目録データベース係長とボランティア18名、計20名は、11月4日(金)11時、東京文京区大塚にあるお茶の水女子大学の南門に到着、ゲートの守衛さんの許可を得てキャンパス内に。文教育学部1号館という伝統の重みに守られた感のある大きな建物を過ぎると、その裏が附属図書館になっている。

入口右手に、当図書館の理念が掲げられている：

「お茶の水女子大学附属図書館は、時間と空間を超える知的交流の場であり、次世代の知を創造し発信する学術情報基盤として機能する。」

1階は、入口をはいると右手にラウンジがあり、正面はキャリアカフェ、その奥はパソコンが70台装備されたラーニングコモンズというスペースと事務室になっている。ラウンジには格式のありそうなグランドピアノが置かれており、時には演奏会が開かれるが、確かな腕を持った音楽家でなければ弾かせないそうだ。キャリアカフェでは、数人の女子学生（男子学生は見当たらない）がグループをつくり活発に議論したりおしゃべりをして、にぎやかな雰囲気である。1階のこれらのスペースは、“時間と空間を超える知的交流の場”として、自由闊達で少々の騒音には寛大な空気が感じられた。

一般学習図書は2階の開架式書庫に収められ、現在126,000冊とのこと。2階にはクワイエット・スタディスペースという静かな勉強スペースがあり、図書館らしい静かな環境となっている。この部屋の隅には、ノートパソコンの自動貸し出しロッカーが据え付けられ、ウィンドウズだけでなく、Macも用意されて、学生が使いやすいように考えられている。2階奥のコーナーに大学院生用の研究スペースというのがあったが、肘掛つきのやや高級な椅子が置かれている。1階オープンスペースは1975年以前の雑誌・書籍を収納していた。

この図書館の特徴は、規模は小さいが、細かい点に配慮がゆきとどき、学生数3,000人に對し一日の利用者数は1,000人を超え、非常によく利用されていることである。

図書館の職員と学生が相互にアイデアを出し合い、創意工夫をしていることが多々見受

けられた。

我々ボランティアの目から見て印象的なことは、図書館ボランティアに相当するLiSA(Library Student Assistant)というユニークな制度を運用している事だった。LiSA(学生)が行う仕事は筑波大学ボランティアの利用環境整備の仕事とほぼ同じであるが、作業した時間に対して報酬が支払われる。その報酬は一般のパートの半分からいとのことで、アルバイトとボランティアの中間的な性格を持つ。



時間の制約はなく、可能な時間に手伝うというもので、1年生、2年生の比率が高いそうだ。LiSAの仕事の延長として図書館の仕事に興味をわき、卒業後京大、東大、千葉大などの図書館職員になった例もあるとのこと。

さて、今回同行の職員さんには、黄色い小旗をもって我々を案内していただいた。団体旅行でよく見かける風景だが、迷い子になりやすい外の人間にとって、たいへんありがたかった。かつて東京女子高等師範学校という伝統を有した現お茶大では、図書館を次世代の知を創る場として、重要な位置づけをおこなっていると思われる。数少ない国立女子大として、今後もますますの発展を祈りたい。
(2011年11月4日見学)



〈LiSAちゃん、おそろいの
エプロンで活動中〉
活動はブログで

東京工業大学見学に参加して

島田久美

木枯らしが吹き秋の深まりを感じる 11 月 19 日、東京工業大学附属図書館見学が行われました。ボランティア 21 名と引率の職員 3 名の参加となりました。

大岡山駅前の道を渡るとすぐに大学の正門へ。構内に入りしばらく行くと、V 字の柱で支えられている斬新なデザインの図書館が目に飛び込んできました。

職員の方のご案内で地下 1 階から図書館内へ入ると、館内は暖かいホッとする空間でした。はじめに新図書館の概要についてお話があり、続いて 2 班に分かれて見学案内が行われました。

新図書館は、2011 年 7 月に全面開館し、建物のフォルムから愛称『チーズケーキ』と呼ばれ、学生に愛されている図書館とのこと。耐震の面からも考慮された設計になっていて、東日本大震災のときにも、揺れをほとんど感じなかったそうです。地下 2 階地上 3 階の 5 階建てで、地下 1・2 階が図書・雑誌・会議録などの図書館エリア、1 階が事務室等、地上 2・3 階が学習スペースに分かれています。

見学してまわると、地下 1・2 階は開放感を重視し、明るく広く感じられるように光庭を取り入れたり書棚の高さを低くしたりと、随所に工夫がなされていました。地上 2・3 階はガラス張りで、外の景色を眺めながらゆったりと学習できる雰囲気でした。ただ、エコガラスを使用してはいますが、夏はかなり暑くなるそうです。書架の表示が小さかったり、グループ研究室やレクチャースペースなどの防音効果があまり高くないなど、デザイン優先の場所がいくつかみられました。

建物の外には、日よけのルーバーが取り付けられ、太陽光発電パネルが設置されていました。屋上にも太陽光発電パネルが設置され、雨水をためる為の貯水機能もあり、エネルギー生産を考えた建物になっていると説明がありました。また、大岡山の植生を生かすため、周囲地域の生息野草を取り入れた「緑の丘」があり、自然の空気と暖かみのある環境を感じました。

今後の課題として、蔵書の増加への対応、学生の学力向上のためのラーニングコモンズの取り組みなどがあるそうですが、移転して間もないので、少し落ち着いてから検討していきたいとのことでした。

図書館見学後、希望者は百年記念館へ移動して東京工業大学博物館の見学に参加しました。モダンな新図書館見学とこれまでの業績を知る博物館見学で、充実した秋の一日となりました。

(2012 年 11 月 19 日見学)



慶応義塾大学三田メディアセンター見学

山内衛

平成 25 年度フォローアップ研修（学外施設見学）として、本年 12 月 12 日（木）、上記センターを訪問しました。同大学図書館は、我がボランティアグループ内でも高ランクの人気があり、かねてから見学希望が出されていました。今回実現できたのは、筑波大学附属図書館側のご努力によるところが大きく、感謝申し上げます。

この日の天気は快晴。JR 田町駅から歩いて 10 分という交通至便な場所にあり、東京タワーの姿が近くにくっきりと見えたのには驚きました。大学があるせいか、駅の周辺は、食堂、商店などが軒を連ねて並び、にぎやかな雰囲気楽しく、またわが街とはかなり違うなど感心もしつつ羨ましさも感じました。

当日午後、同大学三田キャンパス正門前に集合したのは、ボランティア 22 名、筑波大学附属図書館から同行していただいた職員 2 名、総勢 24 名となりました。

さて、三田メディアセンターについて、三田キャンパス内にある三カ所の新旧図書館・図書室を中心に構成され、今回見学する「図書館」は、いわば新館かつ中央図書館的存在です。このほかに、図書館旧館、南館図書室が、いずれも歩いて 2,3 分の近くにありました。

余談になりますが、まずは記念写真をと図書館前に集合した我々を見つけた通りがかりの学生さん（たぶん）が、「さっと」やってきて、デジカメのシャッターを押してくれました。我々一同は、幸先よし！と。

見学に先立ち、図書館側より責任者の方に出迎えていただき、見学も二班に分かれ、それぞれ職員の方々にご案内していただきました。

図書館（新館）は、地上 5 階、地下数階にも書庫のあるつくりで、開架式書庫システムが採用されています。本の借り出しはこの 1 階カウンターのみで行われ、館内への出入りも一カ所、ID カードをゲートで提示する仕組みになっています。キャンパス内図書館（室）三カ所全体の蔵書数は、約 283 万冊とのこと。ただ、所有蔵書全てが三カ所では収めきれないものもあり、他の場所にも分散させているのもあるそうです。

書棚は、一般的なものと、電動式の両方がありました。雑誌の分類は、アルファベット式によっており、和書、洋書、いずれも種類は多いのですが、慶応大（図書館）は、昔から洋書に強いことでは定評があるとの説明を聞いて、文学に疎い私も、そういえば三田文学という言葉をよく耳にしたなど記憶がよみがえってきました。

本の修理、管理は業者に委託、ボランティアは採用していない、書籍の大半は購入しており、寄贈は置き場所の問題もあってあまり受け付けていないという裏話も伺いました。

館内の壁や棚に、さりげなく由緒のありそうな美術品が置かれていたのが、印象に残りました。

新聞は、国内、海外の地域別に、かなり多くの種類がそろえられているように思えまし

た。1階には、かつて主流だった検索カードを収載した蔵書目録が、多くのりっぱな大型本としてそろえられていたという事は、何でも新しい事ばかりを追わない考えなのでしょう。ここの図書館の考えというか、意思を感じます。

この後、見学した南館図書室、図書館旧館のなかでも、旧館は1915年設立、レンガ造りの内部階段の踊り場に、大型のステンドグラスがはめ込まれていました。もとのガラスは、昭和20年5月の空襲で消失しましたが、その後復元されたそうです。

今回の見学で、私にとって最も印象的だったことを挙げるなら、このステンドグラスの歴史と、図書館（南館）1階で開催されている特別展「慶応義塾と戦争Ⅰ～慶応義塾の昭和十八年」（本年12月26日まで）の二つです。特別展は、いわゆる「学徒出陣」に慶応義塾の学生が多数かり出され、多くの方たちが戦死されたその記録を残すことで、戦争の時代をいま一度見つめ直すきっかけになればと企画されたものです。なお、この三田キャンパス正門の向かい側にも、同第II展示場（本年12月18日まで）が開設されていました。

(2013年12月12日見学)



茨城大学図書館見学

谷田部伸子

筑波大学附属図書館主催図書館ボランティア学外施設見学会が12月5日（金）に実施されました。快晴の空の下、マイクロバスをチャーターし2機関を巡りました。私はその内の茨城大学図書館見学の報告をします。

茨城大学図書館は今年4月に本館の増築および耐震工事が終了しリニューアルオープンしました。コンセプトは「真の教養を身につける多彩な“学びの場”—茨城大学発二十一世紀型教育の支援と地域社会との共生—」です。新館南棟と西棟が増築され旧図書館を囲む形に配置され鉄筋コンクリート建で一部3階、地下1階建となっており、面積は約1.6倍に広がりました。



一番印象に残ったのは、学生達が勉強、研究しやすいように種々のタイプのグループ学習室、共同学習エリア、セミナールーム、個室、サイレントルーム等々創意工夫されて設計されており明るい雰囲気となっていることです。ライブラリーカフェ、PCコーナー、展示スペース、ライブラリーホールもあり、特に全国の主要地方新聞を受け入れている「新聞マルシェ」も興味深いものでした。3年前の震災では書庫内の図書資料は上部書棚から約4割が落ちたとのこと。上部書棚には落下防止用のシートを設置したり、揺れると書棚の手前が上にあがり図書が落ちにくくなっている装置などを採用していました。

大学は全5学部で構成されており、水戸キャンパスに人文学部、教育学部、理学部の3学部と、日立キャンパスに工学部、阿見キャンパスに農学部がそれぞれ設置され、キャンパス間の図書館利用はWeb申込みにより行われています。



地域住民や外部からの利用者も積極的に受け入れており現在数十名が登録して利用しているとのこと。なお蔵書数は3キャンパス合計約100万冊。閲覧席数645席。学生数は約1万人とのことです。
(2014年12月5日見学)

1時間半のタイムトリップ

佐々木ますみ

県立歴史館は文書館（アーカイブズ）として構想され、博物館機能（ミュージアム）を加えて昭和49年に開館し、昭和62年には一橋徳川家記念室が新築されました。

当日は、歴史資料課の永井博課長—日本近世史・地方史の研究者として著名な方です—から「結城水野家文書」についてレクチャーを受けました。家康の生母於大の実家である結城藩旧藩主水野家より寄託された資料です。戦国の三大ヒーロー、織田信長の朱印、豊臣秀吉の花押、徳川家康の書状、花押を間近に見せていただきました。長い年月を隔ててはいても、筆を手にこれを書いた人物（たぶん祐筆）、サラサラと花押をしたためたであろう彼の有名な方々の息吹を感じる事ができました。広大な庭園には旧水海道小学校本館が移築され、明治14（1881）年建築のステキな洋風校舎は県指定文化財となっています。



お庭に並ぶトナカイの角を付けた馬の埴輪やサンタ帽を被った「踊る人」の埴輪に見送られて歴史の館をあとにしました。

館職員の皆様、有難うございました。

(2014年12月5日見学)

平成 18 年 5 月

図書館ボランティアについて

図書館ボランティア

筑波大学は開かれた大学として地域社会との融和を図っております。その努力の一つとして 1995 年 6 月 1 日には全国の国立大学に先駆て図書館ボランティア制度を発足させています。

図書館ボランティアはつくば市およびその周辺に住む家庭の主婦、定年退職者などから選ばれており、現在約 50 名近くの図書館ボランティアが活動しています。いずれも生涯学習に大きな関心を持ち、ボランティア活動に熱心であり、豊かな人生経験と教養を備えた人々であります。図書館ボランティアはその活動を通じて、開かれた大学としてのイメージを高め、図書館サービスの向上に、地域社会との融和に貢献しております。

図書館ボランティアはおもに中央図書館で活動し、2階・4階ボランティアカウンターを定位置としております。

その主な活動は：

1) 図書館総合案内

館内窓口案内、資料配置案内、資料探索案内、端末機操作案内、各種申込記入案内、身体障害者や日本語に不慣れな外国人へ図書館利用支援。

2) 対面朗読

視覚障害者のための対面朗読、館内での資料探索支援。

3) 利用環境整備

中央図書館及び体育・芸術図書館各階の書架の整理、図書の修理、図書ラベルの貼り直し、など利用者が使いやすい環境を整える。

4) 体育・芸術関係資料の整理

美術展ポスターなどの整理。

5) その他

外国人のための日本文化紹介、留学生オリエンテーションの補助、図書館見学案内。

などです。

上記 1) 図書館総合案内および 3) 利用環境整備のため、図書館ボランティアは毎週、月～金の 5 日間、午前のシフト（10 時～13 時）、午後のシフト（13 時～16 時）に分かれて活動しています。

視覚障害のある方には上記 2) 対面朗読など、訓練されたボランティアによる支援を行っております（予約が必要）。

留学生の皆さん、図書館を利用されるにあたって、わからないことがあれば、ご遠慮なく図書館ボランティアに相談してください。

図書館ボランティアは喜んでお手伝いします。

ON THE LIBRARY VOLUNTEERS

Prepared by Volunteer

The University of Tsukuba has been maintaining its policy to be friendly to the public, and maintain good relationship with the local community. As one of its efforts toward that objective, the University took a lead to adopt a library volunteer system. The system was started on the first of June 1995, which was said to be the first one among the national universities in Japan.

The number of library volunteers is nearly 50 persons. The system is mainly organized with housewives and retired persons who are living in Tsukuba City and its vicinity. They are having a continued interest on life-long learning, and are well experienced in their lives with good common sense.

It is believed that efforts of these volunteers have contributed for maintaining friendly images of the University and good relationship with local community. Furthermore it brought a lot of improved services of the Library as well.

The library volunteers are generally stationed on the 2nd and 4th floor of the Central Library of the University. Their major missions are:

- 1) General Information Service on the Library:
on general information, on document layout information, assist document search, assist PC-terminal operation, assist filling out various application forms, assist handicapped persons and foreign visitors
- 2) Assist Sight -handicapped Persons:
assist document retrieval and readout these for them
- 3) Maintain Library Environment (Shelf Reading):
check arrangement of books on shelves and their "call number tags" (light maintenance work on books to keep the library environment friendly to users)
- 4) Restore Materials in the Arts and Physical Education Library:
- 5) Others:
introduce Japanese cultures to foreigners, assist library orientations for foreign students, library tour guide

On weekdays, from Monday through Friday, the service of volunteers is done in two shifts, that is, morning shift (10:00 to 13:00) and afternoon shift (13:00 to 16:00).

For sight-handicapped persons, services by specially trained volunteers for the above item 2 is available when requested. (Reservation is needed.)

Whenever any question comes out in your mind, please feel free to contact volunteers at the Volunteer Counter on the 2nd and 4th floor. They are willing to help you.

うたがき

筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第23号

フォローアップ研修の20年

学外研修

平成27年3月発行

編集：筑波大学附属図書館ボランティア広報部

発行：筑波大学附属図書館

〒305-8577

茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL:029-853-2348 (情報管理課)